

## 愛媛偕行

### 石鐵会の歩み

三好 榮治 陸自75

愛媛と言えは、司馬遼太郎先生の『坂の上の雲』で有名な秋山好古と真之兄弟を思い出されることと思います。今回は、兄の秋山好古大将に関わる石鐵会せきてつかいと現在の愛媛偕行石鐵会の歩みについて紹介します。

#### ○愛媛県軍人会の設立

日露戦争後間もない1911年ころ。麴町にあった教育総監部騎兵監であった秋山好古中將（のち大将）は、陸軍士官学校生徒達のこれから、士官学校で教わるだけでなく、国際情勢や戦略・戦術等更なる研鑽が必要であると考え、当時小石川後樂園にあった東京砲兵工廠の提理（工廠長）兵頭雅譽少將（のち中將）と相談され、当時市ヶ谷台にあった陸軍士官学校の近くに、生徒達の集う場所を作ろうということになり、兵頭少將、尾崎中佐、石川少佐の三名が發起人となり、在京の愛媛県出

身將校達に趣旨書を配布して賛同を求めた。

翌1912年4月、有志による幹事会を開催して「愛媛県軍人会」を創設し、8月には市ヶ谷八幡下の桔梗屋を集会所と定めた。11月には、秋山中将や発揮人の兵頭少将はじめ26名の將校が集まり、次のことを決めた。①陸軍士官学校生徒のため月1回この集会所において講話を行う。②集会所に有益な書籍を備え付ける。③本会の趣旨・規約を地方在職者、就中中佐以上にまず通知する。

1914年には、集会所を市ヶ谷八幡下から四谷坂下町の愛媛県出身軍属多田氏宅に移した。

### ○石鐵会への名称変更

1918年、軍事参議官であった秋山好古大将と陸軍省人事局長であった白川義則少将（のち大将）が会同され、愛媛県軍人会から愛媛の名峰石鎚山（別称石鐵山）に因み、石鐵会（せきてつかい）に名称を変更された。1932年10月、四谷本村町に土地を購入し、二階建ての新館を建設し、生徒達の研究・集会や上京した將校の宿泊に供せられた。

1937年1月東京府より、念願

の財団法人の指定を受けた。このころから日華事変の拡大による影響で、將校会員及び生徒の増大に伴い会館が手狭となり、移転を検討、山下汽船社長山下亀三郎氏より、渋谷区大山町に土地約4百坪の寄贈を受け、旧藩主はじめ財界人多数からも寄付を受けた。また、將校から応分の醸金を集め、1940年床面積180坪の新館を建設した。

陸軍士官学校も1937年本科が座間に、航士が入間に、予科も1941年朝霞に移転し、大元帥たる昭和天皇より、座間は「相武台」、入間は「修武台」、朝霞は「振武台」という名称を賜り、このことから士官学校生徒を「台上の人」と呼んだらしい。いづれにしても、各士官学校とも集会所から遠く、戦局も厳しくなり、生徒の休日の立ち寄りや上京した將校の宿泊利用が多くなったようである。

### ○一般財団法人豫山会の設立

1945年8月終戦に伴い、東京都から法人の解散勧告がなされるも、速やかに寄付行為（定款）の変更を行い、愛媛県出身軍人の遺族子弟の育英事業を行うとして、事業を継続

した。その後も再三解散勧告がなされ、駐留軍による接収も噂されて大変だったようである。

1950年2月、所在地を東京から愛媛県松山市に移し、「愛媛県の体育振興を計り、もって新日本建設の一助とする」として愛媛県教育委員会から法人化が認められ、財団法人豫山会を設立し、石鐵会の財産を引き継いだ。戦後間もないことから設立当初、理事長には日本商工会議所会頭や通産大臣を務めた参議院議員高橋龍太郎氏が、理事及び評議員には民間人が就任した。その後、旧陸軍將校の復員や公職追放解除に伴い、旧軍人が逐次復帰され、理事・評議員に就任されていった。

1967年寄付行為を改定し、「愛媛県関係青少年に対し、社会教育活動振興を助成し、その援助を行うとともに、体育の奨励に努め、もって心身ともに健全な青少年の育成に寄与する。」を目的とし、事業として①青少年の社会的善行の奨励等、②青少年の体育・スポーツの奨励振興、③青少年に対する援助に関すること、④その他目的を達成するために必要な事業とした。

1977年には、賃貸マンション

を建設し、財務基盤を充実され、2012年には、一般財団法人に指定された。

現在、理事・評議員の多くは、愛媛県出身の元幹部自衛官が就任されて活躍されており、愛媛県の青少年のほか、愛媛県出身の防衛大学校学生にもご支援されている。私も学生であったころ、葉山に一戸建ての日曜下宿を借りて頂き、活用させて頂いた思い出がある。

### ○石鐵会の再設立と愛媛偕行石鐵会への移行

1952年愛媛県に復員された石鐵会会員有志により、秋山大将らが設立に関わられた石鐵会の名称と伝統を受け継ぎ、①会員相互の親睦、②英霊（戦犯刑死者22柱を含む）の慰霊顕彰、③戦争犠牲者の援護を目的として、新たに任意団体として石鐵会が再設立された。

その後、全国組織の偕行社の活動に合わせ、各府県偕行会が設立されるなかで、公益財団法人偕行社と共

に歩むという意味を込めて、石鐵会から愛媛偕行石鐵会と名称を変更した。

2005年ころになると、旧軍出

身の将校・生徒に加え、自衛隊出身の元幹部自衛官が加わるようになって、現在では幹部自衛官出身者が大半を占めるようになってきた。

我々は、「先人から何を引き継いだのか」とふと思うことがある。それはひとえに、「将校・生徒としての誇りと気概、そして我が国日本への思い」ではないだろうか。

### ○教育者秋山好古

石鐵会の創設に深く関わられた秋山好古大将の教育者としての人間像に触れたいと思います。

秋山大将は、勇猛果敢かつ豪胆なイメージがありますが、1923年予備役となり、翌年郷里の松山の私立北予中学校（現在の愛媛県立松山北高校）校長を6年間勤められました。秋山校長は、実学、勤労を重視し、生徒個人の人格形成、そのための個性・適性を見出して育てることに徹し、その実践として毎日、早朝から校門に立ち、登校してくる生徒一人ひとりに挨拶を実践、よく生徒を誉め、誉めるのと同時に、字を綺麗に書きなさい、元氣よく挨拶しなさいなど、一人ひとりに声掛けされたらしい。また、生徒や教職員の不

祥事は全て校長の責任に帰するものとし、在任中に何度も引責辞任願を理事会に提出、その都度、驚かれて慰留されたらしい。当時生徒のみならず教職員も遅刻、無断欠勤は日常的であったが、秋山校長自ら実践される態度を見て、勤務態度は徐々に改善されたようである。

秋山大将は、大阪師範学校を卒業し、大阪と名古屋の小学校で教鞭をとったのち、陸軍士官学校に進み、陸軍では教育総監まで務めた教育者であった。

松山北高校の校長室には、秋山好古直筆の額「荒怠相誠」（荒んだ心や怠け心を互いに戒め合う）が現在も掲げられている。

1930年当時陸軍大臣であった白川大将が、秋山校長の健康を心配され、校長から退き養生されるよう具申されて、やっと退かれたという。その年、死に際の最後の言葉は、「馬引け」であった。享年72歳、軍人としても教育者としても悔いのない人生であったことと拝察する。

東京の青山霊園と郷里松山の道後温泉近くの鷺谷霊園に永眠されておられる。